

コロナ禍における手芸の在り方の変化

—マスク不足による手作りマスクの普及に着目して—

谷口 茉由

[指導教員: 武庫川女子大学講師 池田 仁美]

1. 研究の背景と目的

2020年1月、中国・武漢から広まったコロナウイルスは世界中に影響をもたらしている。コロナウイルス流行前、手芸は趣味の一つとして位置づけられていた¹⁾。手芸を行う人は近年減少傾向にある。江崎が2013年当時の大学生（男子68名、女子82名）に実施した手芸に対する意識調査では、余暇利用で手芸以外にしたいことがあるという意見や手芸の必要性が感じられないなどの意見が挙げられた²⁾。また、同調査で多く挙げられた意見から、手芸の重要性の低下とともに、既製品で間に合うという認識があったとわかった。従来既製品で間に合っていたマスクがコロナウイルスによって入手できなくなった2020年1月末、入手手段として浮上したのが手芸である。コロナ禍を経たことで、手芸に興味以外の要素が加わったことが考えられる。

本研究ではコロナ禍において手作りマスクの必要性に迫られたマスクに着目し、手作りマスクを通してコロナ禍における手芸がどのように変化したのかを明らかにする。

2. 本研究の構成

本研究では、最初にメディアに着目して、Instagramと新聞記事の投稿を調査し、マスクを手作りすることに対しての世間の見方を考察した。次に布製マスクの普及の現状について、定点観測と女子大学生の手作りマスクの利用及び布製マスクへの見方に関するアンケートを実施した。既製品で間に合っていたものがなくなった時に手作りに近い布製マスクがどの程度受容されたのかを読み解いた。女子大学生とその親世代の人が作ったマスクのサンプル調査では、現在手芸をする人がどのような人かを調べた。また、女子大学生の手芸に対する意識調査とともに現在の女子大学生の手芸について考えた。最後にこれらの調査から得られた社会的背景と実像の相互関係を読み解き、コロナ禍における現在の手芸に対する在り方の変化を考察した。

3. メディアに見る手作りマスクの普及と利用について

2020年1月1日～2020年10月31日にかけて掲載された読売新聞の手作りマスクに関連する記事を調査した。また、2020年5月26日～2020年10月31日の期間Instagramに手作りマスクに関連するハッシュタグをつけて投稿された内容を調査し、手作りマスクの普及と利用について分析した。

新聞記事では2月から手作りマスクに関連する記事が見られるようになった。全国各地で手作りマスクが寄贈されたな

キーワード：手芸、手作りマスク、布製マスク、COVID-19

どの記事からは、手作りマスクを通して手芸に関わった人がコロナウイルス流行前より増えたと考えられる。また、読者から寄せられた投稿を掲載している記事では「ミシンを引っ張りだしてきた」という内容の記事もあり、手芸から遠のいていた人も今回のマスク不足で手芸と関わる時間が増えたと窺える。新聞調査では小中学生、高校生、大人まで年齢性別問わずマスクを制作していたことがわかった。記事の中だけでも手作りマスクは全国各地で制作され、寄贈されていたことから手作りマスクは普及していると言える。さらに、手作りマスクの記事が多くあったということは、読者が「手作りマスク」という単語も多く目にするようになる。新聞記事を通して手芸は身近なものになったと考えられる。

Instagramの調査では月3回のペースでハッシュタグ調査を実施した。調査を開始した時期はマスク不足が徐々に解消されていた時期であったため、投稿数が増えることはあっても計測日から計測日までの間に増える投稿数の量は徐々に少なくなっていった。また計測初日の5月26日から9月6日まで夏用マスクの投稿数が増え続けたことから、Instagramの利用者は、マスクを着用して過ごす夏に向けて夏用マスクに関心を高めていたと考えられる。

新聞記事も調査後半にかけて記事の数が減少したことから、人々の手作りマスクへの関心は薄くなっていったと考えられる。それと同時に、マスク着用が新しい生活様式になったことで、マスクの存在が当たり前になり、手作りマスクも生活に馴染むものになったと推察できる。

4. 布製マスクの利用に関する実態調査

定点観測は、JR中山寺駅の改札前とイオンモール伊丹店のフードコート前で6月と11月に2回ずつ実施し、計7,129名の着用実態を把握することができた。その結果、大人の布製マスクの着用率はJR中山寺駅改札前では6月に4.5%だったのが11月には16.6%と、12.1ポイント上がり、フードコート前では6月に13.6%だったのが11月には17.4%と、3.8ポイント上がり、大人の布製マスクの着用率が増えていることがわかった。また、6月の調査で見た布製マスクの特徴は手作り感あふれるもので、女性やお年寄りが着けていることが多い印象だった。しかし11月になると、男性が布製マスクを着けている姿も多く見られるようになり、性別関係なく布製マスクを着用するようになったことがわかった。また、店頭に使い捨てマスクが並ぶようになった11月でも布製マスクを着用している人が多くいたことから、コロナウイルス流行前

よりも布製マスクに対する抵抗感は低くなっていると考えられる。

女子大学生の手作りマスクの利用及び布製マスクへの見方に関するアンケートでは、手作りマスクの利用の有無で手作りマスクに対する見方が違い、利用したことがない人は、見た目に対して否定的な意見を持っていることがわかった。布製マスクに対する質問では、手作りマスクの利用の有無に関わらず、回答者の周りで布製マスクをしている人がいることや、布製マスクをコロナウイルス流行前より見るようになったと感じる人が多いことがわかった。これらの調査より世間の布製マスクの着用率はコロナウイルス流行前より増え、手作りマスクはコロナウイルス流行前より受容された実態が見えた。

5. 手作りマスクのサンプル調査と女子大学生の手芸に対する意識調査

手作りマスクのサンプル調査では、マスクを制作した女子大学生11名とその親世代6名を対象に記述式アンケートを実施し、制作したマスクについて調査、分析した。

調査の結果、どちらの世代もマスクの制作において参考にするのはインターネットやYouTube、無料配布された作り方のチラシなどであった。手作りマスクを制作した女子大学生の中には普段手芸を行わないと回答した人もいた。このことからマスク作りは手軽に始められる手芸であると考えられる。親世代は回答者全員が普段から手芸をする人だった。6名中5名が幼稚園、保育園、小学校から指定されて作ったものがあると答えたことから現在大学生の年齢の人が幼稚園や小学校に通っていたおおよそ15年前は手作りのものを子どもに持たせていたことがわかる。また、このことから15年前は大人から子どもへ手作りのものが渡される機会が多かったのではないかと推察できる。

女子大学生105名を対象にした意識調査では手芸の必要性について問うた。その結果、手芸は必要だと考える女子大学生が96名で、全体の約91%いることがわかった。必要だと思う理由に多く挙げられたのは生活面で必要という意見だった。また手芸に対して、温かみがあるというイメージを持つ人もおり、手芸に関するエピソードでは、作ってもらったものを大切にすることが多かった。

2013年の研究²⁾と違い、本調査で「手芸が役に立つから必要である」という声が多かったのは、コロナウイルスによって既製品で間に合わない時期があったからだを推察できる。手芸に対する意識は2013年からコロナ禍の現在までに変わっていたと考えられる。

6. 結論

メディアに見る手作りマスクの普及と利用の調査のうち、新聞記事調査では、手作りマスクを作り寄贈、配布する動きが多く取り上げられ、手作りマスクがメインではない記事でも手作りマスクが登場する機会が増えた。

Instagramのハッシュタグ調査では、手作りマスクに関連する投稿が多く見られ、マスクを着用して過ごす夏に向けて夏用マスクに注目が集まったこともわかった。

布製マスクの利用に関する実態調査では布製マスクに対する抵抗が低くなったことや世間で手作りマスクが受け入れられるようになったことがわかった。

サンプル調査と女子大学生の手芸に対する意識調査では、マスクは手軽に始めることの出来る手芸であること、現在の女子大学生には、手芸は温かみがあるというイメージを持つ人も多く、作ってもらったものを大事にする傾向があることがわかった。これらを踏まえて、手作りマスクを通して見る、コロナ禍における現在の手芸の在り方の変化は、作る過程を重視した「趣味」から、制作物が重視される「手段」へと在り方が変化していると言える。

7. 全体考察と今後の課題

新聞の紙面には、手作りマスクの作り方を手芸店が紹介する記事が掲載され、紙面上でも街でも、多くの人が手作りマスクに触れたことで手芸を身近なものに感じるようになった。マスク作りを通して普段手芸を行わない人も手芸に関わった。女子大学生へのアンケートでも、足りないものを作れたらいいという手段としての必要性が挙げられた。趣味であった手芸が手段の手芸へと変化したのは様々な調査から読み取ることができる。

本研究では手作りマスクを中心に手芸をみた。手作りマスクは、作る過程を楽しむものというより、着用することを目的にしたものである。そのため、手作りマスクを通して手芸を見ると、制作物が重要視されているように感じた。

今後の課題としては、今後マスクを着用しない生活が当たり前になった時に手芸の在り方がどう変化するかを調査する必要がある。また手芸には様々な種類があり、着目するものによって在り方が違う可能性がある。そのため、手作りマスクではないものから手芸を見ることも必要である。

注及び参考文献

- 1) 山崎明子：近代日本と手芸とジェンダー，世織書房，3，2005
 - 2) 山崎智子：現代の大学生における手芸に対する意識，人間科学研究，26，1，128-128，2013
- ・大塚寿子：手芸に対する意識調査，和洋女子大学紀要 家政系編，29，227-243，1989
 - ・渡瀬典子：20世紀末の余暇活動における「手芸」—NHK「婦人百科」を対象に一，一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集，67，0，119，2015
 - ・渡瀬典子：新聞の「生活面」に表れるライフスタイルの変容「手作り」はどのように扱われてきたか，一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集，70，0，246，2018
 - ・堀内かおる，武井洋子，田部井恵美子：被服製作及び手芸の教育的意義—学習要求からの考察—，東京学芸大学紀要，40，127-140，1988